

使徒の働き15章30－41節「教会の一致と働きの分離」

1A 教会への励ましのことば 30－35

1B 大きな喜び 30－32

2B 教える働き 33－35

2A 福音宣教者の確執 36－41

1B 思い入れの違い 36－38

2B 分かれた道 39－41

本文

使徒の働き 15 章を開いてください。私たちの学びは、前回 15 章 29 節まで来ましたので、今晩は 30 節から見ていきます。教会にとって、大きな危機、それこそ私たちの救いにも関わる危機がありました。それは、異邦人が、割礼やモーセの律法を守らずとも、ただ、福音のことばを聞いて、信じるだけで、救われるのかどうか？ということでもあります。それを、ユダヤ人だけで構成されているエルサレムの教会で、その通りだ、異邦人に重荷を負わせてはいけないという判断を、聖霊の導きの中で行ったのです。このおかげで、ユダヤ教の中の、ごく少数派であった、いわばイエス教団が、アブラハムの契約のそった、すべての国民が祝福を受ける、救いの使信となったのです。今晩は、その続きを読みます。

1A 教会への励ましのことば 30－35

1B 大きな喜び 30－32

³⁰ さて、一行は送り出されてアンティオキアに下り、教会の会衆を集めて手紙を手渡した。³¹ 人々はそれを読んで、その励ましのことばに喜んだ。

ここの「一行」には、少なくとも四人がいます。まず、バルナバとパウロがいます。バルナバは、元々、「慰めの子」と呼ばれ、エルサレムで評判の良い兄弟でした。彼がアンティオキアに行き、そこで異邦人が救う神の恵みを見て、励まして言った人です。この彼が、パウロをキリキア地方のタルソにまで行き、探し出し、アンティオキアの教会の指導者の一人にさせた人です。そして、自分の出身地であるキプロス島で宣教を始め、それから、パウロのキリキア地方に近い、ピシディアやリカオニアに行き、再び戻って、アンティオキアに戻ってきたのです。

そして、パウロは、すでにエルサレムの指導者たちには受け入れられ、交わりを持っています。キリストの弟子たちを迫害していた彼は、ダマスコに行く途上で主イエスご自身に会い、回心し、福音を宣べ伝え始めました。

この二人に、エルサレムの教会から、指導者であったユダとシラスが遣わされます。彼らが、その手紙について、確かにその通りであると証言します。前回、話しましたように、ユダは、「**バルサバと呼ばれるユダ**」(22 節)と呼ばれ、バルサバは安息日の子という意味です。彼は、ヘブル語を話すユダヤ人、伝統的なヘブライ的なユダヤ人です。それに対して、シラスは、ギリシア語を話すユダヤ人、ヘレニストのユダヤ人であり、ギリシア語を話し、また 16 章 37 節には、彼がローマ市民であることも分かります。ユダヤ人の歴史や文化において、初めは教会の分裂のきっかけにもなった、ヘブライ的なユダヤ人と、ギリシア的なユダヤ人の二人が、アンティオキアに行くということは、象徴的でもあります。ユダヤ人とギリシア人が、キリストあって一つであるということを強める働きができるでしょう。

ところで、使徒の働きを見ると、「**一行**」という言葉が多く出てきます。宣教の働きを、単独で行うことは非常にまれです。パウロは、一人残されてアテネにいたのですが、その時はかなり不安がありました。アテネからコリントに行った時は、「**弱く、恐れおののいていました**」と述懐しています(Ⅰコリ 2:3)。教会の交わりから出て行き、遣わされていく者たちの中でさえ、交わりが必要であることを示すものです。

そして、アンティオキアでは「**教会の会衆を集め**」ています。彼らは、どのような決定が下されたか、ものすごく気になっていたことでしょう。みなさんが想像してください、救いを得るために、ユダヤ教徒にならなければいけないのか、そうでないのか？であります。割れを受けて、モーセの律法を守り、改宗手続きを取るのです。そうでないと救われないのか、それとも、福音のことばを聞いて、それで信じて、救われるのかの違いです。

彼らは、重荷が負わせられないことを知って、非常に喜んでいます。神の恵み、神の救いにある真理は、人々を喜ばせます。私たちの主イエスは、喜びを持っており、それを弟子たちに分かち合いたいと願われています。「ヨハ 15:11 **わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。**」

³² **ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。**

これまで、私たちは、使徒という職が与えられた人たちを見ました。そして、教会を治める働きとして長老も出てきましたね。パウロとバルナバが、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと福音宣教をしたところに引き返してきた時、「**彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。**」とあります(14:23)。長老は、牧会の働きをする人たちであります。みことばで養い、世話をし、狼から羊を守る働きです。それから、食卓に仕える人々として執事も出てきましたね。さらに、ピリポのような伝道者もありました。

そして、11 章の最後のところに、アンティオキアにエルサレムから、預言者たちが下ってきたという言葉があります。その中の一人、アガポは飢饉が世界中に来ることを前もって伝えました。ここでも、預言者が出てきます。ユダとシラスが、その働きをしています。

エペソ人への手紙 4 章で、パウロが、キリストが建て上げる指導者として、こう言っています。「4:11-12 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」教会は、キリストのからだであり、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるために、これら使徒たち、預言者、また伝道者、そして牧師また教師を立てておられます。

そして、預言者としての働きですが、アガポのように将来のことを前もって知らせる、予告的なことばもあります。けれども、ここにルカが記しているように、励ましのことばが預言の大半です。「Ⅰコリ 14:3 預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。」

そして、使徒たちと預言者たちは、教会の土台を据えていった人たちであることも、エペソ 2 章 20 節を見るとわかります。「エペ 2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。」今、聖書が正典として確立している中、かつてのように、教会の土台を据えるような使徒の働き、預言者の働きはないですが、けれども、使徒的な賜物、預言的な賜物は今でも有効です。

使徒的な賜物とは、まだ教会が建てられていないようなところに遣わされ、そこで諸教会が生まれ、諸教会に指導的な働きをする人です。かつての宣教の歴史であれば、中国内陸への宣教を開拓した、ハドソン・テイラーのような働きは、使徒的な働きと言えるでしょう。また預言は今も、その時に必要な励まし、将来の希望など、聖霊が教会に語られること、また世界に対して語られることを、普遍的な内容ではなく、その時、その場所に必要な言葉を語ります。

2B 教える働き 33－35

³³ 二人は、しばらく滞在した後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、自分たちを遣わした人々のところに帰って行った。

すばらしいですね、ユダとシラスは、手紙の内容を証言するために来たのですが、それを越えて、アンティオキアにおける交わりがすばらしく、長く滞在しました。そして、異邦人の兄弟たちによって、平安にあいさつで送られて、エルサレムの教会に戻ります。自分たちを遣わした教会だからです。

しかし次を見てください、34 節がないですね。これは新改訳が原本としているギリシア語の写本

にないだけで、他の写本にはあるからです。下の引照部分を見てください。「しかし、シラスはそこにとどまることに決めた。」とあります。シラスはこの後、パウロと共に第二の宣教旅行に出て行きます。彼はギリシア語が話せるユダヤ人で、またローマ市民ですから、思うところがあったのでしょう。事実、パウロと共に宣教の働きに出て行くのです。

³⁵ パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のことばを教え、福音を宣べ伝えた。

アンティオキアにおいて、パウロとバルナバは、主に、主のことばを教える働きをしました。続けて、人々に救いをもたらす福音も宣べ伝えていましたが、信じた者たちが養われ、建て上げられるように、神のことばを教えて行ったのです。他の多くの人々も、そのようにしたようです。

教会が存在している目的について、先にエペソ 4 章で、指導者たちをキリストが立てられた所を読みましたが、その続きを見ます。「4:12-13 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」キリストのからだが建て上げられること。御子についての信仰と知識において、一人の成熟した大人となること、キリストの満ち満ちた身丈になるまで成長することです。ここでは、建築物として、建て上げられるということと、人の肉体の成長として、成長という言葉のどちらもが使われています。

ここの教えるという教会の働きにおいて、教会は往々にして弱いと感じます。悪い忬度があるでしょう。「神のことばのような、堅い食物を与えると、乳しか飲むことのできない人々がつまずいてしまう。」という、余計なお世話とも言えるべき気遣いです。お乳ばかり与えては、成長する人が一向に成長しないままにいることになるのです。むしろ聖書は、堅い食物が食べられるように、強く促し、勧めている部分があるのです。「ヘブ 5:13-14 乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。14 固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」整えられた聖徒たちこそが、奉仕の働きをすることができるのであり、キリストにある成熟した人へと成長できるのです。

2A 福音宣教者の確執 36－41

1B 思い入れの違い 36－38

³⁶ それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」

パウロとバルナバの福音宣教によって、建て上げられた教会が多くありました。アンティオキアの教会が、神のことばが教えられて、整えられているわけですが、その宣教地における諸教会も、

神のことばによって建て上げられて行かないといけません。パウロの手紙には、自分が離れて行った後に、信者たちがどうなっているのかを気にしているパウロのことばが、多く載っています。例えば、テサロニケの信者たちについて、こう言っています。「Ⅰテサ 3:5 そういうわけで、私もはや耐えられなくなって、あなたがたの信仰の様子を知るために、テモテを遣わしたのです。それは、誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。」

教会の世界では、単独で伝道をして、それで良しとする人々がいます。自分だけで動くんですね。けれども、あの伝道者と呼んでよいパウロは、それを信じていません。彼は、だれかが種を植えたなら、水を注ぐ人が必要になると教えています。コリントの人々に、こう教えました。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。(Ⅰコリ 3:6) こうやって、人は信仰によって育つのです。ただ種蒔きだけでは、育ちません。このことについては、バルナバも意気投合しています。ところが、思わぬ意見の食い違いが起きました。

³⁷ バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くつもりであった。³⁸ しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。

先に話しましたように、彼ら二人は自分たちだけで行こうとは思っていません。チームとして行きたい、一行として旅をしたいと願っています。そこで、バルナバが何の疑いもなく、マルコを連れて行こうとしています。マルコは、あのマルコによる福音書を書き記したマルコです。まだ若いです。第一次宣教旅行で、バルナバとパウロに同行しましたが、キプロスを離れ、アナトリア半島へ渡り、パンフィリア地方のペルガに行く前に、エルサレムに帰ってしまいました。

しかし、バルナバにとっては思い入れがあります。一つは、彼が自分のいとこだということですから(Ⅱコ 4:10)。そういったつながりがあります。バルナバはキプロス出身の人ですが、マルコも親戚なので、もしかしたらキプロスとつながりがあるかもしれません。キプロスは、自分にとっては見慣れていても、全く知らないところ、アナトリア半島に行くことは不安を感じたのでしょうか。それで、離れて行ってしまいました。しかし、バルナバは、「慰めの子」という名のとおり、宣教の働きに改め関わることによって、彼を育てたいという思いがあったことでしょう。未熟かもしれないが、彼は成長するに違いないと思ったかもしれません。現に、バルナバはそうやって、タルソにいたパウロをアンティオキアに連れてきたのですから。また、エルサレムの兄弟たちにパウロの回心を伝えたのも、バルナバです。

けれども、パウロは、現実的に考えたに違いありません。ピシディアに入り、それからリカオニアに行き、リステラでは石打によって、死んだようになっていたのです。パウロには、その後遺症は確実に残っていた事でしょう。肉体のとげが、ペルガでマラリアに罹って、目を悪くしたのか、リステラで石打ちにあって、そこで受けた傷なのかわかりませんが、肉体のとげを持っていました。マル

コが、そういった宣教にはまだ耐えられないとみなしたのだと思います。

2B 分かれた道 39-41

³⁹ こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、⁴⁰ パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

先ほどまで、教会の一致のことで全力を尽くしていた二人が、宣教の方法のことで激しい議論をして、別行動を取ってしまうのは、皮肉なことだと見えます。どちらも、宣教については真剣勝負です。二人とも賜物があり、そして宣教への情熱はとてつもなく強いです。そういった仲においては、議論になると激しくなるのも付き物でしょう。そして、別行動を取ることも付き物でしょう。

思い出すのが、ジーザス・ムーブメントにおける、牧者チャック・スミスと、伝道者ロニー・フリズビーの確執です。チャックは、みことばを教えることを強調していましたが、ロニーは奇跡を求めました。それでロニーが別れたのですが、けれども、再び戻ってきています。

ここで大事なことは、マルコのことがきっかけになっていますが、おそらく、二人の間には思い入れが地域的にも違ったのではないかとと思われることです。バルナバはマルコを連れて、キプロスに行っています。そして、パウロはシラスを選び、次の節に書いてありますが、シリアおよびキリア地方に行っています。彼の出身地タルソがあります。

実は、バルナバとパウロが第一次宣教旅行に行く時も、バルナバがキプロスに思い入れがあり、パウロがアナトリア半島のほうに思い入れがあって、それを足した旅行だったのではないかとということです。マルコは、バルナバのいとこだということ、心はもっとバルナバのほうに向かっていたことでしょう。ですから、マルコはきっかけであり、そもそも二人の思い入れに温度差があったのではないかと考えられます。これは、人間ですから当然ですし、全く同じように考えているはずありません。自分の出身地に自然に思い入れが出てくるのは、当然のことです。

思えば、イスラエル王国が分裂したのもそうでしょう。元々、ベテルより北のイスラエルの地に思い入れのある十部族と、南のユダが単独で大きな部族があり、ベニヤミンもユダについていたというのは、地理的にも十分あり得ることです。ダビデが生前の時ですら、彼がアブサロムのクーデターが終わって、エルサレムに戻る時にすでにユダとイスラエルでは激しい口論があったことが書き記されています。ソロモンの死後、後継のレハブアムが、ヤロブアムの願い、すなわち税の軽減を無視したことから、分裂になりましたが、それはきっかけであり、長年の思いの違いがありました。

では、これは悪いことなのでしょうか？ 激しい議論、意見の不一致で別行動を取ることは、残念

なことでは、あります。けれども、別の言い方をすれば、それぞれが別行動を取ることによって、宣教の範囲がさらに広まったとも言えるのです。バルナバとパウロが、初めから終わりまでいっしょに動くこともなく、もうすでに整えられた宣教者たち、例えばシラスはエルサレムの教会の指導者の一人でもありますから、十分できるわけです。だから、キプロスへの働きかけができるし、パウロは、シリアとキリキア、さらに西へ宣教範囲を広げることができました。

この物別れが、それほど深刻なことではなかったのを証明するのは、パウロが、何か悪い思いを持つことなく、バルナバまたマルコのことは見ているのが、手紙の中に出て来ているからです。パウロは、自分の他にバルナバも入れて、それで自分たちの使徒職について語っている文言があります。「Ⅰコリ 9:6 あるいは、私とバルナバだけには、生活のために働かなくてもよいという権利がないのですか。」などです。

そしてマルコについて、コロサイ 4 章 10 節でこう言っています。「私とともに囚人となっているアリスタルコと、バルナバのいとこであるマルコが、あなたがたによろしくと言っています。このマルコについては、もし彼があなたがたのところに行ったら迎え入れるように、という指示をあなたがたはすでに受けています。」マルコは、ローマで囚人となっているパウロと共にいるのです。そして、今、コロサイの教会に彼が行く時は、彼を迎え入れるようにという指示まで出しています。マルコは、すでにパウロの同労者として、動いています。同じ時、囚人であった時に書いたピレモンの手紙には、「ピレモ 1:24 私の同労者たち、マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。」と、はっきり言っています。

そして、彼が二回目に捕えられ、今度は皇帝ネロによって死刑になることを知っていた時に、テモテ第二の手紙を書きました。「4:11 ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」自分にとって、役に立つと言っています。彼が死ぬ直前に、彼に頼みたいことがあるということは、相当、信頼しています。以前は、役に立たないと思っていたパウロですが、それはとても短い期間で、その後、マルコは同労者として、しかも信頼できる同労者として、パウロと行動を共にしていたのです。

いわゆる、主にある人間模様です。人には個性があり、その時々仲たがいがあるかもしれません。しかし、主はその仲たがいをも用いられ、かつその不一致も修復される働きもされて、それで宣教は進むのです。キリストのからだは、からだと呼ばれるように、有機的であり、病気にかかっても逆にそれが免疫となり、次に備えられるということもあり、不思議で、神秘的です。主の働きに従事するしもべたちにも、その不思議と神秘が付き物ではないか、と思います。

そしてパウロとシラスが、「兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した」とあります。自分たちで勝手に行ったのではなく、兄弟たちから遣わされて行きます。そして、主の恵みにゆだねられ

ています。これから二人が経験することは、神の恵みの証しです。自分たちが何かをしたというものではなく、彼らによって主が、恵みによって事を運ばせてくださいます。

⁴¹ そしてシリアおよびキリキアを通り、諸教会を力づけた。

これから 16 章以降は、バルナバの働きは消え、パウロの第二次宣教旅行の記録となっていきます。同行したシラスは、多大な貢献をします。パウロの手紙にも、ラテン語名の「シルワノ」で何度となく、同労者として名が出てきます。パウロだけでなく、ペテロも、第一の手紙を書いた時、それは実は口述筆記であり、シラスが書いたことをペテロは話しています。「Ⅰ ペテ 5:12 忠実な兄弟として私が信頼しているシルワノによって、私は簡潔に書き送り、勧めをし、これが神のまことの恵みであることを証しました。この恵みの中にしっかりと立っていなさい。」

宣教の働きが、単独で行われるものでは決してなく、このようにチームによって、主が恵みによって運ばせてくださるものと分かりますね。